

豊穰な知の世界

—退溪學成立前夜の朱子學をめぐる(3)—

川原 秀城

四 李彦迪の『大學章句補遺』と盧守愼の『大學集録』

明宗 4 年 (1549)、李彦迪は『大學章句補遺』を著した。宣祖 16 年 (1583)、盧守愼は『改正大學』を編み、翌年 (1584)、「晦齋先生大學章句補遺後跋」ほかを補足して『大學集録』を編輯した。著作の内容はすべて『大學』テキストの錯簡の釐正にかかわり、結果的に朱子が考定した『大學章句』の權威に挑戦するところがある⁽¹⁾。

1 『禮記』大學篇と『大學章句』

1.1 朱子の『大學章句』

『大學章句』經 1 章に附せられた朱子の解説によれば、朱子の考定

(1) 本節執筆にあたっては、최재목 (崔在穆) 「朝鮮에서 朱子『大學章句』에 대한 한 挑戰 -盧守愼의 『大學集録』을 中心으로-」(『陽明學』 제27호, 한국양명학회, 2010) に教えられたところが多い。崔先生の論文は盧守愼の『大學集録』を朝鮮における朱子學への挑戦として高く評價したものであるが、筆者は 2015 年 5 月、盧守愼にかんする予備調査のとき上の論文を介して『大學集録』の存在を知り、その稀覯本について先生に質問した。すでにして 2015 年 12 月、復旦大學での國際會議の折、『大學集録』を収める光山盧氏敬平公宗派宗親會出版の『穌齋先生續集』(1991) を先生から贈與された。望外の喜びとはまさにこのことである。『大學集録』を分析できたのはひとえに崔在穆先生のおかげといわねばならない。附記して感謝の意を表する。

大學の本文 1751 字⁽²⁾は、「舊本にすこぶる錯簡がある」ため、舊本のテキストに手をくわえ、舊文の次序を移易しその構成を変更し、分章して經 1 章 (205 字) と傳 10 章 (1546 字) としたものである。

朱子によるテキスト編定は、構成の徹底的な改變をとおして、命題相互の整合と論理の嚴格化を追求することを特徴とする。逆にいえば、舊本の文字については原則、變更せず、それをそのまま使う。錯簡の更定とはいっても、複数の刊本や抄本をそろえて各本の由來を考え、1 字 1 句を比較検討して文字の異同を明らかにし、歴史的な各種根據にもとづいて文字を確定したものではない。朱子が「舊本にすこぶる錯簡がある」というのは、單に書の構成、章や節の前後をさすにすぎない。朱子の考定には意校をのぞけば獨自の文字校勘がほとんどなく、文獻的な個々の文字の校訂自體は漢唐の研究成果に依存することがそのことを如實に示している。

『大學章句』のいう「舊本」とは、「記大學後」に朱子自らが「戴氏禮書」と説明することからして、前漢の戴聖の編纂した『小戴禮』すなわち『禮記』大學篇のこと。正確には後漢の鄭玄注・唐の孔穎達疏の『禮記正義』の大學第 42 篇を意味している。

1.2 『禮記』大學篇

そもそも『禮記』は、孔子後學が自らの禮にかんする説を記した雜書である。ほんらい經 (經書) ではない⁽³⁾。現代風にいえば、儒家禮學論文集とのべるのが適當であろう。唐の陸德明『經典釋文』序録によれば、『禮記』の起源はこうである。すなわち、孔子の門徒たちが禮にかんして聞くとところを書き記して、禮記をつくった。後人通儒がまた、それを損益した。かくして「中庸篇」は子思の作るところであ

(2) 程子のいう衍文 4 字を含めれば 1755 字である。

(3) 『禮記』の記字が禮經の注記として編まれたことをよく示している。

り、「緇衣篇」は公孫尼子の制するところである。鄭玄は、「月令篇」は呂不韋の撰するところといい（鄭玄説）、盧植は、「王制篇」は漢時博士の爲るところという（盧植説）、云々。『禮記』は經ではなく、諸篇には後師の説が多くみえるが、陸德明のいうところ、それは『禮記』が七十子後學の禮學論文集であるからにはかならない⁽⁴⁾。

鄭玄の『六藝論』などによれば、後漢當時、世に行われたのは、漢初はじめて『士禮』『儀禮』17篇を傳えた高堂生から五傳弟子にあたる、戴徳と戴聖の學のみである。戴徳の傳えた禮記85篇を『大戴禮』といい、戴聖の傳えた禮記49篇を『小戴禮』という。後者がすなわち『禮記』である、と。戴徳と戴聖は相謀らずそれぞれ儀禮を傳え、それぞれ禮記を傳えたが、多數の禮記のうち『小戴禮』49篇のみが『禮記』と專稱されるのは、鄭玄が劉向別錄本や橋仁本・楊榮本・曹褒本・盧植本・馬融本など多數の諸異本・異文を校勘して『小戴禮』の注を完成してからのことである。『鄭玄注』をもつ戴聖の篇章が世に行われ、『大戴禮』はしだいに亡失した。

後漢の鄭玄になり、禮學は禮經の『儀禮』に『周禮』『禮記』をくわえて三禮の學に發展した。三禮學の影響は大きく、鄭玄後、禮學は一變した。鄭學盛況の結果、魏になり『儀禮』の記の『禮記』が三禮の一つとして學官に立てられたからである⁽⁵⁾。これは『禮記』が『儀禮』『周禮』とならんで經書と考えられるようになったことを示している。

『禮記』に收められた大學篇もまた、鄭玄の視點のもとに經書の1篇として獨自の發展を開始した。鄭玄『三禮目錄』は大學の篇名につ

(4) 『禮記』に今古文の分がないのも、理由は同じところにある。

(5) 楊天宇『鄭玄三禮注研究』（天津人民出版社、2007）通論編・第5章参照。

いて、博學はそれによって政をうまく行うことができることを記しているからである（名曰大學者、以其記博學可以爲政也）と説明する。また『禮記正義』孔穎達疏も上の鄭玄目錄を引いて、政治は明德の由るところにもとづき、まず“誠意”より始めなければならないと封建政治の要諦として博學を解釋している。鄭玄の大學解釋が“誠意”を重んじるのは、おそらく『禮記』大學篇が『大學章句』のごとく所謂誠其意章を傳 6 章として後方におかず、いわゆる三綱領八條目につづいてただちに誠意に言及し、誠意を中心命題として議論を展開した（表 2 参照）ことによるであろう⁽⁶⁾。また王守仁が「大學古本序」において「『大學』の要は、誠意のみ」と明言するのも、理由は同じく『禮記』大學篇の配列にしたがうからにちがいない。

『禮記』の學は鄭玄後、魏の王肅が『鄭玄注』に對抗して禮記校注本（『王肅注』）をつくったが、總體的には校勘と音義を中心に發展したといつてよい。唐の陸德明『經典釋文』の列舉する『禮記』の原文への漢魏六朝の校勘と音義がそのことをみごとに示している。孫炎・業遵・庾蔚之・李軌・劉昌宗・徐邈・射慈・謝楨・孫毓・繆炳・曹耽・尹毅・蔡謨・范宣・徐爰・沈重などの研究成果がそれである。ちなみに音義とは漢字の破音現象を利用して發音を示して意味を確定するものであり、廣義の注釋といふことができる。一方、六朝期にはまた、學官に立てられた經書の注を再注釋する義疏學が高度に發展した。『禮記』の義疏については、孔穎達「禮記正義序」によれば、南朝に賀瑒・庾蔚之・崔靈恩・沈重・皇侃などがあり、北朝に徐遵明・李業興・李寶鼎・侯聰・熊安生などがあるが、「世に現れるはただ皇（侃）熊（安生）二家のみ」といふ。

(6) 山下龍二「大學解説」（全釋漢文大系 3『大學・中庸』、集英社、1974）を参照。

『禮記』をめぐる『經典釋文』後の最大の成果といえ、『禮記正義』である。唐太宗の詔命をうけて孔穎達などが漢魏六朝の校勘音義および六朝の義疏學の成果を吸収し、鄭玄注に注釋をくわえた。

漢唐 600 年以上にわたる『禮記』注釋史は『鄭玄注』をへて『禮記正義』に結實したわけであるが、その注釋の特徴は複数のテキストを比較検討して原文 1 字 1 句を確定し、文字校勘を基礎として原文の意味を解釋したところにあることは疑うべくもない。

1.3 程朱による『禮記』大學篇の考定

漢唐「大學」は『禮記』から獨立して流布することではなく、『禮記』の 1 篇でありつづけたが、宋朝になると情況は大きく一變する。司馬光が『大學廣義』を著しそれを單行したからである。『大學廣義』自體は亡失したが、司馬光の著作は「大學」表章が二程以前にはじまったことを示している。

だが經學史に即すれば「大學」の學がふたたび大きく變質したのは、二程が大學篇を抜きだし、その構成を改め自説にひきつけて内容を詳細に論じてからである。大學定本の作成も二程以降、原則が大きく變化した。その特徴は校勘を極度に簡略化し、個別的な文字の校定を先行研究に任せて全體的な構成の確定に意識を集中するところにある。その獨特の校勘方式は論理を嚴密にしようという洛閩諸儒の強い意志をよく示している。

程朱以降の改正大學の作業は、緻密であるが單純である。文字の校勘をほとんど『禮記正義』に委ね構成の變更（舊次の更定）に終始するため、『大學章句』の分章を基準にしてその章名節名をもちいれば一連の作業を簡単に圖式化することができる。以下、『大學章句』の經 1

章→ 0、傳 n 章→ n と表記し⁽⁷⁾、章下の各節については 3₁、3₂ などと表記して⁽⁸⁾、『禮記』大學篇のテキストが『大學章句』のそれに結實していく過程をみることにしよう（表 2）。すなわち、記號 0 は經一章をさし、1 は傳首の釋明明德章、2 は傳二の釋新民章、3 は傳三の釋止於至善章、4 は傳四の釋本末章、5 は傳五の釋格物致知章、6 は傳六の釋誠意章、7 は傳七の釋正心修身章、8 は傳八の釋修身齊家章、9 は傳九の釋齊家治國章、10 は傳十の釋治國平天下章のことである。

(7) 圖表化については、山下龍二「大學解説」（全釋漢文大系 3『大學・中庸』、集英社、1974）や최재목（崔在穆）「朝鮮에서 朱子『大學章句』에 대한 한 挑戰 -盧守愼의 『大學集錄』을 中心으로-」（『陽明學』제27호、한국양명학회、2010）などのアイデアを借りた。ただし兩氏は『禮記』大學篇を基礎として章ごとにアルファベット名をつけ各章を區別している。

(8) 記號 0₁ は經 1 章の「大學之道、在明明德、在親民、在止於至善」を示し、0₂ は「知止而後有定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮而後能得」、0₃ は「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣」、0₄ は經 1 章の残り（八條目節）を示す。また記號 3₁ は傳 3 章の前半部を示し、3₂ は傳 3 章の後半部、「詩云、瞻彼淇澳」以下を示している。

『禮記』大學篇	程顥『改正大學』	程頤『改正大學』	朱子『大學章句』
0	0 ₁ 、0 ₂ 、0 ₃	0	0
5	1、2、3 ₁	4	
6	0 ₄	5	1、2、3 ₁
3 ₂	5		3 ₂
1、2、3 ₁		1、2、3 ₁	4
	6	6	5
4	7、8、9、10 ₁	7、8、9、10 ₁	6
7、8、9、10 ₁	3 ₂	3 ₂	7、8、9、10 ₁
10 ₂ 、10 ₃ 、10 ₄	4	10 ₃ 、10 ₂ 、10 ₄	10 ₂ 、10 ₃ 、10 ₄
	10 ₂ 、10 ₃ 、10 ₄		

表 2. 大學テキストの同異一覧（朱子の經 1 章→0、傳 n 章→n）

大學定本の作成に最初に着手したのは、間違いなく程顥である。各本の構成や時代の先後からして、『禮記』大學篇→程顥『改正大學』→程頤『改正大學』→朱子『大學章句』と考えざるをえないからである。特に程顥本のばあい、大學篇とは（1、2、3₁）と（7、8、9、10₁）をのぞいて章節の配列を同じくし、また程頤本とは一連の（6、7、8、9、10₁、3₂）を共通にしており、大學篇の後、程頤の前にあることはみやすいところであろう。

論理に即すれば、大學定本の作成を試みるには最低限、その前提として『大學』の表章が必要である。程顥は「大學は孔子の遺書であるが、これから學べば誤ることはない（大學乃孔氏遺書、須從此學則不差）」といい（『程氏遺書』卷 2 上）、大學を大きく顯彰した。また『禮記』大學篇の舊次を改め、各句の意味を解説發揮した。程頤は程顥をうけて、「初學入徳の門としては、『大學』に如くものはない（入徳之門、無如大學）」（同卷 22 上）、「修身は『大學』の序に學ばねばならない。『大學』は聖人の完書である（修身、當學大學之序。大學、聖人之完書也）」（同卷 24）

などと主張し、その価値を大々的に稱賛した。また『禮記』大學篇は先後、次序を失するとし、構成を改めた。程頤の改正においては、經 1 章の「在親民」の親字を「當に新につくるべし」とし、それによって朱子による經傳分割、三綱領八綱領への道をひらいたことには特に注意しなければならない。

二程による大學改正をうけて、朱子は最後の一步を踏みだした。『大學章句』が冒頭、子程子曰として『『大學』は孔氏の遺書にして初學入徳の門なり』というのは、そのことを明らかにしている。朱子の「記大學後」が、『大學』の經 205 字は誤るところがないが、傳 10 章は簡編が散脱し、傳文がすこぶるその次を失するゆえ、自ら揆らず、程子の改正案にしたがって傳 10 章のテキストを復定した。傳の第 1、2、3₁ 章の考定は程本にしたがい、第 3₂、4、5 章は自ら定め、第 6 章は程本にしたがい、第 7、8、9、10 章は舊本（鄭玄）にしたがった、云々というのも、同じく程頤の編定が『大學章句』のフレームワークを決めたことをみごとに示している。朱子自身は『大學』經文自體の改定をしていないというが、実際には、程頤にしたがって經 1 章の「親民」を「新民」と改め、換骨奪胎して經の命題を完全に自己の命題に變え、それによって經とは異質の自らの思想（己説）を展開している⁹⁾。朱子は程頤の獨特の思考や大學テキストの個々の改正を直接にうけついで、思想變革を完成させたのである。

『大學章句』の改定は多岐にわたりきわめて獨創的であるけれども、朱子の改定の性格上、後世しばしば問題視されるところも多い。すなわち、(1) 經と傳に分別したこと、(2) 舊次を顛倒したこと、(3) 欠

(9) 『大學章句』を『大學』の訓釋ととらえることはできない。『禮記』大學篇と區別し、主張内容を異にする別の書物と考えたほうがよいであろう。

文の傳 5 章の格物致知傳（補傳）を「程子の意をとって」補綴したと、(4) 經 1 章の「親民」を「新民」と改めたこと、(5) 撰人を誤認して、經 1 章は孔子の言にして曾子これを述べ、傳 10 章は曾子の意にして門人これを記すとしたことなどである。經學史や書誌學の視点からみれば、いずれも無理からぬ疑問や指摘であろう。

特に朝鮮朝朱子學においては、上記第 3 點の補傳の處理をめぐって考察研究がくりひろげられた。本章の主題はそこにある。具體的には節を改めて論じたい。

1.4 定説と異端

補傳をめぐる朝鮮朝朱子學者の考察研究であるが、朱子の定説に異を唱えるからといって、ただちに異端と斷すべきではない。そのことは朱子の考定の論理整合的な性格を前提に考えれば自ずと明らかであろう。

たとえば上記の第 4 點。『大學或問』は或者の問い「程頤が經文の“親”を“新”と改めたのには根據があるのか。朱子が程頤説によるのはどう考えてそうするのか。己が意をもって輕々しく經文を改めるのは、おそらくは傳疑の義でないと思うが、どうか」にたいして、こう答えた。すなわち、考えるところがなくてただちに改めれば、まことに或者の譏りのとおりであろう。だが「親民」は文義から推せばその理がなく、「新民」は傳文からすればその根據がある。程頤が改正するのは當然なところである。また程頤が舊文の親字を残しながら「親、當作新」とするのは、漢儒釋經の已むをえざる變例であり、傳疑を害するところはない。だが絶対に經文は改めてならないとすれば、世の學者は誤をうけ訛にしたがい、心でその非を知りながらことさらに穿鑿付會して經説の通じることのみを求めるようになるであろう。聖學を侮り後學を誤らせることはこれより甚だしいものはない。單純に經文の不改を原則とすべきではないであろう。『大學或問』にみえる朱子の解答を読むかぎり、自己の改定が「以己意輕改經文」にあた

る、もしくはそう疑われていることを自覚しながら、「以文義推之」「以傳文考之」の結果、經文といえども改定せざるをえないことを切々と訴えている。「文義をもって推す」「傳文をもって考える」が朱子の論理のキーワードである。それは程朱の校勘が結局のところ、意校にすぎないことを如實に示している。

程朱の校勘は第 4 點のみならず、おおむね意校である。傳文の改定にくわえて經文の改定も自らの哲學や論理以外に何の根據もない。だが論理以外に根據がなければ、眞摯に論理を追求しても恣意的という批判からは逃れることはできない。客觀を追い求める漢唐の校勘や訓釋とは、性格やめざすところが根本的に異なっている。清の皮錫瑞『經學歷史』（經學變古時代）は宋學の全體的傾向について、「宋人は注疏を信ぜず、その結果しだいに經を疑い、疑經の結果、ついには經を改め、經を刪り、經文を移易して己説に就くにいたった」というが、程朱の校勘や訓釋の特徴を説明して餘すところがない。自己の哲學（「説」）が「經」「注」「疏」の前にあり、自己の哲學の論理的追求に學問の動機があるのが、すなわち程朱學である。謙虚な經書への尊崇（經至上主義）はそこにはない。

そもそも眞の程朱學者とは、經書といえども絶對化しない、程朱の精神と原則をうけいれた者のことである。斷じて程朱の 1 字 1 句を經文のごとく金科玉條として信じる者のことではない。だが程朱の精神と原則を自らの問學方針とするかぎり、理の當然として、個別的な傳や説のみならず經にたいしても命題の論理的な追求を避けてとおることはできない。「道問學」上、自己の哲學や論理的な整合性が何にも増して重要だからである。

眞の朱子學者はそれゆえ、斯學の論理を重んじる精神や原則にしたがうことによって、斯學に潜む恣意的かつ排他的な道統意識の暴走をくい止め、自己の命題だけでなく他者の斯學的な多種多様な論理追求の試みも高く評價するにちがいない。また、可能なかぎり論理的必然

を追求して、朱子定説と結論が異なることを根據として斥邪の對象とせず、朱子の精神と原則に魅了された異説を説く意校者の研究を異端として排斥することもしないであろう。眞の朱子學者であれば李彦迪や盧守愼など、朝鮮朝朱子學者の斬新な試みをもって異端と斷ずることができないゆえんである。

2 李彦迪の『大學章句補遺』と『續大學或問』

2.1 李彦迪の改定

李彦迪は、字を復古、號を晦齋・紫溪翁という。驪州の人。明宗・宣祖のころ、金宏弼・鄭汝昌・趙光祖とあわせて四賢と稱された⁽¹⁰⁾。士禍期を代表する朱子學者の一人である。仁宗元年（1545）7月、仁宗が昇遐し、明宗が即位した。明宗は當時 11 才、生母の文定王后が垂簾聽政した。文定王后は同母弟の尹元衡やその腹心の李芑などの力を借りて、敵對する尹任・柳仁淑・柳灌などを自決に追いこみ尹任派の官僚を竄殺した。これを乙巳士禍という。乙巳士禍にあたっては、李彦迪は罪禍を免れたが、明宗 2 年（1547）、良才驛壁書獄が起こるや、江界府に謫徙され、7 年後に謫所で卒した（1553）。李彦迪の代表作はおおむねこの流刑の時期に書かれたものが多い。『大學章句補遺』『續大學或問』（1549）をはじめとして、『奉先雜儀』『求仁錄』『進修八規』（1550）『中庸九經衍義』（1553）などがそれである。

李彦迪の『大學章句補遺』『續大學或問』は文字どおり、朱子の『大學章句』『大學或問』の補遺である。『大學章句補遺』と『續大學或問』の關係も、朱子の章句と或問のそれに等しい。

『大學章句補遺』の構成は漢籍の常例どおり、序文と本文と跋からなっている。序文は書頭に朱子の「大學章句序」を引き、つぎに自ら

(10) 李滉の死後には、金宏弼・鄭汝昌・趙光祖・李彦迪に李滉をくわえて五賢と稱した。

の「大學章句補遺序」をおく。本文は『大學章句』にならって最初に「子程子曰、大學孔氏遺書而初學入德之門也……」を配置し、以下、『大學章句』の經文傳文と章句を轉用しながら、必要に応じて段落ごとに經文傳文の次序を前後させる。經文傳文の個々の文字は、朱子學者の常例にならって變更しようとはしない。朱子の章句は補足すべきところを書きそえ、解釋の違うところを書きかえる。後跋は盧守愼と趙綱のそれである。一方、『續大學或問』の構成は『大學或問』に等しく、問答形式を借りて自らの主張を説明している。

論述の意圖は李彦迪の自序に詳しい。すなわち、『大學』一篇の旨は、『書』堯典の「克明俊德、以親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦、黎民於變時雍」と大禹謨の「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」にもとづく。堯舜兩聖の盡性立教の軌範は符節のように合し、日月のように炳らかであり、疑うべきところはない。孔子は前後聖人の道を祖述し、曾子がそれを傳えたが、秦火により湮滅した。幸い程朱數君子が出て、『大學』を表章し、錯誤を更定し、微蘊を發揮し、一篇の中、綱條は粲然となった。だが聖經賢傳の文は全書ではなく、斷缺があり、辭義も完全とはいえない。特に傳5章の格物致知の補傳がそうである。わたしはかつて『大學章句』を読み補傳にいたるたびに、本文を實見することができないことを歎いた。最近、明の學者がその缺文を篇中からえて章句を更著したと聞いたが、論文を入手することはできなかった。そこで已むなく、臆見をもって經文中の2節をとって、格物致知の文にあてた。反復參玩したが、「晦庵また起こるといえども、また或いは斯に取るあらん」と思う（中略）。聊か淺見を記して、判斷を後の君子に求めたい、云爾。李彦迪の考定

は朱子の義理を徹底的に追求する精神のもと⁽¹¹⁾、『大學章句』のフレームワークに完全にのっとり（上節 1、2、4、5 點を是認し）ながら、朱子の傳 5 章の補綴（上節 3 點）について考察したものといえることができるであろう。

李彦迪による改正は、わずかに朱子の經 1 章と傳 5 章（李彦迪の分章によれば、經 1 章と傳 4 章）にたいしてのみである⁽¹²⁾。『大學章句補遺』の經傳分章を上記記號をもってあらわせば、經 1 章は 0₁、0₄、4 からなり、傳首章は 1、傳 2 章は 2、傳 3 章は 3、傳 4 の格物致知章は 0₃、0₂、5 からなる。また傳 5 章は 6、傳 6 章は 7、傳 7 章は 8、傳 8 章は 9、傳 9 章は 10 と一対一に對應する。李彦迪の經 1 章傳 9 章のシステムは、朱子の傳 4 章を経文ととらえなおし經 1 章に移易するゆえ、1 章減り、傳 5 章以降、朱子の經 1 章傳 10 章のそれと各おの 1 次ずれている。

李彦迪『大學章句補遺』の經 1 章と傳 4 章の本文を書きだせば、以下のとおりである。本文は各節の順序をのぞけば、朱子と異なるところはない。

經一章

0₁ 大學之道、在明明德、在親民（親當作新）、在止於至善。

0₄ 古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後身修、身修而後

(11) 朱子にもとづく義理を盡くさんとする李彦迪の治學（道問學の）精神は、『續大學或問』の最初と最後の問答によく現われている。

(12) 李彦迪は『大學章句』傳 10 章（自書の傳 9 章）の朱子章句にも新たな解説を追加したところがある。だがその追加は 50 字であり、また章句の文字を 1 字も改めていない。改正の例に含める必要はないであろう。

家齊、家齊而後國治、國治而後天下平。自天子以至於庶人、
壹是皆以修身爲本。其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其
所薄者厚、未之有也。

4 子曰、「聽訟、吾猶人也。必也使無訟乎」。無情者不得盡其
辭、大畏民志。此謂知本。

傳四章

0₃ 物有本末、事有終始。知所先後、則近道矣。

0₂ 知止而後有定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮
而後能得。

5 此謂知本（衍文也）、此謂知之至也。

李彦迪の解釋は當然、朱子と同じでないけれども、可能なかぎり朱子
の解釋にしたがおうとする態度が顯著である。經 1 章のばあい、三綱
領節（0_i）も八條目節（0_a）も聽訟節（4）も、經文につづけてその朱子
章句を轉寫する。朱子章句のあとに自説を補うのは、聽訟節のみであ
る。また傳 4 章のばあい、李彦迪の解釋は朱子と相當違い、それゆえ
各節も傳文につづけて朱子の章句を轉用することはないが、章後には
やはり朱子の補傳を轉寫し、補傳に自己の見解を添える形で自説を明
らかにしている。

2.2 李彦迪の大學説

李彦迪が『大學章句』の舊次を改めなければならないと考えるのに
は、かれなりの理由がある。程朱に範をとる論理的整合性がそれであ
る。

李彦迪は自らの經 1 章の編定について、その據るところを説明する。
すなわち、「子曰」にはじまる聽訟節（4）を章末に列するのは、程頤
の舊に復するものであり、古人の述作はかならず古昔聖賢の言をとつ
てこれを結ぶからである。經 1 章は「孔子の言にして曾子これを述べ
る」（朱子章句）以上、章末を孔子の言で結ぶ必要があるのは當然であ
ろう。そもそも經 1 章は最初に三綱領（0_i）をかかげ、つぎに八條目

(0₄)をのべて三綱領の義を明らかにし、最後に三綱領八條目の意を發揮する構造をもつ。最後の聽訟節(4)は八條目の治國平天下の道が聽理の明にあるのではなく、本を端し源を清くして人心を感じさせるところにあることを示している。『易』咸卦彖傳の「聖人感人心而天下和平」や『中庸』33章の「奏假無言、時靡有爭。是故君子不賞而民勸、不怒而民威於鈇鉞」「予懷明德、不大聲以色。子曰、聲色之於以化民、末也」と説明が等しいことが、そのよき證據である、云々。

また李彦迪は朱子經文中から兩節(0₃と0₂)を移して傳4章の欠を補うことについて、その理由を説明する。すなわち、この兩節を経1章の三綱領(0₁)と八條目(0₄)の間においても、緊切な意味は大してないが、移して格物致知章の文とすれば、その意の包むところはなほだ廣く、經文の意味をすこしも損なわずに傳義を大いに補うことができる。そもそも『大學』の教えは格物致知にはじまり、凡そ天下萬物庶事には本末終始がないことはない。それゆえ學者は天下のあらゆる事象(原文、事物)に即いて⁽¹³⁾、本末終始の理を窮め⁽¹⁴⁾、極處に到らざるなきことを務めなければならない。その理を窮めるとき、かならずその重きを先にしその輕きを後にし、その急なところを先にしその緩いところを後にすれば、進德修業は循々として序があり、道に到達することも遠くないであろう(0₃の説明)。すでに能く物理の本末

(13) 李彦迪は朱子の事物解釋について「朱子獨以明德新民爲物之本末、知止能得爲事之終始」と分析し、「其意偏而不周矣」と斷じている(『續大學或問』或問格物致知章)。

(14) 李彦迪はまた、格物致知のとき、物理の本末終始を正確に知る必要があること、本末終始をわけて兩段事とするべからざること(本末終始道器理事の一貫性)を多數の經文を引いて強調している(『續大學或問』或問格物致知章)。

終始を窮格してその止まるべき地を知れば、事物當然の則においてみな定見があり、心に妄動危殆の累はない。その思慮はますます明らかになり、結果、物理の微妙を盡くし、中心悦豫するにいたる（0₂の説明）。これこそ格物致知の要法にほかならない、云々。

李彦迪の編定は次章の釋誠意や傳 6 章の釋正心の功を導きだすことができ、みごとに諸章諸節の移易である。だが『大學章句』の舊次を顛倒した結果、李彦迪の解釋にも朱子の章句と異同が生じた。三則ある。第一は格物致知章 0₂の「慮」の解釋である。『大學章句』が「慮、謂處事精詳」とするのにたいして、李彦迪は程子の「能致其知、則思日益明」（『大學或問』）を根據に「慮、思也」と訓じる。思は窮理盡心の要の謂いである。第二は十六字心法の「允執厥中」について、朱子の明言がないにもかかわらず、「中」を至善の意味とし、至善に止まることと解することである。李彦迪によれば、中は天下の大本（明德新民の極）であり、中を執って明德を明らかにし至善に止まるべきのみならず、中をもちいて民を新たにし至善に止まるようにしなければならない。第三は仁を治國平天下の本と斷じることである。李彦迪のみるところ、天命人心の去就離合は、もっぱら人君の仁と不仁に繋がる。李彦迪の仁説は士禍期の朱子學者の關心の所在をよく示しており、興味深い。

李廷龜（1564-1635、號は月沙）の『月沙集』別集卷 7 の遺事は、壬辰倭亂のとき明の經略使として來朝した宋應昌が程朱の大學編定について隨問講解しながら、李彦迪の説について「すこぶる中朝の議論に合する」と高く評價したことを傳えている⁽¹⁵⁾。宋應昌は明朝の學術動向を勘案して『大學章句』の改定を相對化して評價しており、公平な判

(15) 『晦齋全書』（成均館大學校大東文化研究院、1973）の李佑成「解題」を參照。

斷とのべてよいであろう。

3 『大學集録』と「晦齋先生大學章句補遺後跋」

3.1 経緯

明宗 21 年 (1566)、李全仁は疏文 (「獻進修八規疏」) をそえて、亡き父の李彦迪の『進修八規』を上進した。明宗は上進をうけて、故人を元の爵位に戻すように命じた。同年、李彦迪の名譽回復後、李滉は李全仁の請によって「晦齋行狀」を撰し、また『晦齋集』を校正した。翌年、明宗は昇遐し、宣祖が即位した。宣祖は明宗の意志をつぎ、李彦迪の遺書の搜索を命じた。

宣祖 7 年 (1574)、盧守愼は李全仁の子の李浚の請によって『晦齋集』の序を著した。翌年、『晦齋集』は盧序を戴いて、慶州府で刊行された⁽¹⁶⁾。『穌齋集』巻 7 の「晦齋先生年譜後叙」によれば、文集刊行後、李浚はまた年譜の編輯を依頼し、盧守愼はそれを完遂した。『晦齋全書』所収の「年譜」がそれである。また「晦齋先生大學補遺後跋」(1584)によれば、李浚はかつて『大學章句補遺』の跋の執筆を委嘱。のち弟の淳と辨書⁽¹⁷⁾をつくり寄示し、勉督すること十余年。今年また訪ねてきて事を進めることを請うた、云々。『大學章句補遺』執筆 (1549) から約 35 年後、盧守愼は李彦迪の遺族の強い要請をうけて『大學』関連書や関連論文を涉獵し、それによって朝鮮朱子學史上、新たな地平を開拓することに成功したのである。

(16) 藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究』集部 (京都大學學術出版會、2006) を参照。

(17) 李全仁編『關西問答錄』附録の「上盧相國書」がそれである。書中、盧守愼を右議政とよぶからには、李浚などによる辨書の寄示をもって 1573 年以降のこととすべきであろう。なお辨書が論及するのは、わずか董槐・王柏・權近のみである。

康復誠「穌齋年譜」によれば、宣祖 16 年 (1583)、盧守愼は『改正大學』を撰輯した。『改正大學』は書名の示すごとく、中國における程顥以來の改正大學の試みを調査しその内實を明らかにしたものである。書の特徴は資料集の形式をとって原文を引用するところにあり、解説も原書に譲り自らの見解をまったくのべていない。引用書を順に示せば、(1)『河南程氏經說』卷 5、(2) 黃震『黃氏日抄』卷 28、(3) 蔡清『四書蒙引』卷 1、(4)『宋史』王柏傳、(5) 都穆『聽雨紀談』である⁽¹⁸⁾。

翌年、盧守愼は「晦齋先生大學章句補遺後跋」を書きあげた。跋文末尾の「萬曆甲申二月既望芝嶺後學盧守愼謹跋」がその執筆日時 (1584 年 2 月 16 日) を明示している。

盧守愼は李彦迪『大學章句補遺』の後跋を執筆したのち、時をあまりおかずして、『改正大學』にふたたび加筆して『大學集錄』を編輯したらしい。『穌齋先生續集』所収の『大學集錄』が書後に上記の「晦齋先生大學章句補遺後跋」を載せる⁽¹⁹⁾ ことからして、その點を推測することができる。自著の後跋に日付けの記載があれば、一般にはそれが書の執筆月日を意味するからである。再編の際、『改正大學』に加筆されたのは反朱子の王守仁說と護朱子の權近說と「晦齋先生大學章句補遺後跋」であり、加筆の結果、書の性格が『大學』関連資料集から大きく變化したことには特に注意すべきであろう。

3.2 『大學集錄』

『大學集錄』は『改正大學』の再編本であり、構成は順に (1)『河

(18) 『改正大學』については、최재목「朝鮮에서 朱子『大學章句』에 대한 한 挑戰 -盧守愼의 『大學集錄』을 中心으로-」を参照。

(19) この行爲は「晦齋先生大學章句補遺後跋」をそのまま『大學集錄』の後跋としたことを意味している。

南程氏經說』卷 5、(2) 黃震『黃氏日抄』卷 28、(3) 蔡清『四書蒙引』卷 1、(4) 『宋史』王柏傳、(5) 王守仁「古大學」「大學問」「大學古本序」、(6) 都穆『聽雨紀談』、(7) 權近『入學圖說』大學指掌之圖にみえる改正大學の實例などを引き、(8) 最後を自ら書いた後跋で結んでいる。

『大學集錄』が最初に引くのは、『河南程氏經說』卷 5 の「明道先生改正大學」と「伊川先生改正大學」である。二程の改正案の提示は、改正大學諸案を網羅しようという盧守愼の意圖をよく示している。

第二の引用は、南宋の黃震（1213-1281）の『黃氏日抄』卷 28・讀禮記 15・大學第 42 からである。『大學集錄』は『黃氏日抄』の引く「禮記元本」と「大學章句」と董槐（?-1262）の改正大學をほぼそのまま列挙している。各説の詳細は

大學章句	董槐	宋濂、鄭濟	蔡清	大學古本
0	0 ₁ 、0 ₄	0 ₁ 、0 ₄	0 ₁ 、0 ₄	0
				5
1	1	1	1	6
2	2	2	2	3 ₂
3	3	3	3	1
4	0 ₂ 、0 ₃ 、5 ₁ 、4、5 ₂	0 ₂ 、0 ₃ 、4、5 ₂	0 ₃ 、0 ₂ 、4、5 ₂	2
5	6	6	6	3 ₁
6	7	7	7	4
7	8	8	8	7
8	9	9	9	8
9	10	10	10	9
10				10

表 3. 改正大學一覧（朱子の經 1 章→0、傳 n 章→n）

表 3 に明らかであろう。黃震によれば、いま世をあげて誦習するのは、ただ朱子の章句のみである。古昔を存するため、先に「禮記元本」を録記し、誦習の便のため、つぎに「大學章句」を抄した。ただ致知章

については、董槐説を參用し、合否を試觀した、云々。

注意すべきは、黄震が格物致知の隠れた意味を解明するための参考として董槐説をとりあげたことである。朱子を批判する意識はそこにはない（あるいはほとんどない）とのべてよいであろう。

第三の引用は、明の蔡清（1453-1508）の『四書蒙引』卷 1・大學章句からである。蔡清は朱子經 1 章の 0₂、0₃ を論じるにあたって、自己の解釋を展開したあと、格物致知の義を釋するという或説を紹介し、方孝孺（1357-1402）の『遜志齋集』卷 18 の「題大學篆書正文後」（1381）を引用する。方孝孺はいう。朱子は致知格物傳を亡失としたが、董槐や葉夢鼎（1200-1279）・王柏などは「傳はいまだかつて欠けず」とし、0₂、0₃ を 4 の右におき傳 4 章とした。また車若水（約 1209-1275）は同説の信すべきことを論證した。宋濂（1310-1381）は朱子の意をとって傳 4 章章句を補おうとしたがいまだ果たさず、鄭濟は學を宋濂にうけて、師説を刊行した、と。『四書蒙引』は方孝孺の跋文につづいて、宋濂・鄭濟の更定大學の經 1 章と傳 4 章を引用する。「前輩更定大學經傳」がそれである。

だが蔡清は諸先學の定めたところに満足せず、さらに微修正をくわえた。傳 4 章の 0₂ と 0₃ を入れ替え、また傳 4 章は「所謂致知在格物者」にはじまり、以下 0₃、0₂、4、5₂ とつづくとするのがそれである。方孝孺や蔡清などの改正大學は、一群の朱子學者が「朱子に異なるも道に乖らざれば、また朱子の取るところなり」と信じて疑わなかったことをみごとに示している。

第四の引用は、『宋史』卷 438・儒林 8・王柏傳からである。王柏傳によれば、王柏は『大學』致知格物章はいまだかつて亡ばずと主張し、知止章、0₂、0₃ を聽訟 4 の上に還した、という。

第五の引用は、明の王守仁（1472-1529、號は陽明）の「古大學」「大

學問」「大學古本序」である⁽²⁰⁾。王守仁は『大學章句』が『禮記』元本の舊次を顛倒し經傳に分章した結果、聖人の意が失われたとし、『大學古本』にもとづく哲學體系を主張した。朱子の哲學體系の全面的な否定である。

王守仁によれば⁽²¹⁾、『大學』の要は、「誠意」のみ。「誠意」の功は、「格物」すなわち意念の在るところについて事（物）を正（格）し、もって正に歸するのみ。それゆえ「誠意」にもとづかず、ただ「格物」を追求しても、また「格物」に務めず、ただ「誠意」を追求しても、誠意の極致の「至善に止まる」ことはできない。「至善に止まる」ためには、「致知」すなわち天地萬物一體の仁の「良知」を完全に發現しなければならない。これを「致良知」という。「致知」は「誠意」の本であり、「格物」は「致知」の實である。「物が格すれば」すなわち「知致」「意誠」になり、その本體に復する。これを「至善に止まる」という。「正心」は心の本體（天命の性）に復することであり、「修身」はその用を著すことである。「良知」は己に即していえば、天命の性に根づく「明德」を意味し、人に即していえば、吾が一體の仁を達する「親民」を意味する。「明明德」はかならず「親民」にあり、「親民」はその明德を明らかにするゆえんである、云々。王守仁のみるところ、人々は至善が吾が心にあることを知らず、これをその外にもとめ、もって事々物々みな定理ありとし、至善を事々物々の中にもとめようとする（朱子の格物）。それゆえ支離決裂、錯雜紛紜し、一定の向のある

(20) 盧守愼は『大學古本』を轉寫していない。だがそれは先に引いた『黃氏日抄』の禮記元本をみればその内容を知ることができるからである。

(21) 「大學古本序」の推論を「大學問」によって補いながらまとめている。

ことを知らないのである。

「大學古本序」は『禮記』大學篇の更定にもとづく朱子哲學を稱して「居敬の説を自己の解釋にくみあわせて、論理の一貫性を失い、格物致知傳を補って、聖人の本旨より離れる。わたしはその學が日々至善から遠ざかっていくことを恐れている（合之以敬而益綴、補之以傳益離。吾懼學之日遠於至善也）」という。また「古大學」は「格物致知の傳については、董槐や王柏の見るところ⁽²²⁾をとる（格致之傳、取董丞相王文憲之所見）」とのべている。王守仁が朱子の改正大學を完全否定していたことは疑うべくもない。

第六の引用は、明の都穆（1458-1525）の『聽雨紀談』からである。都穆は王守仁と活躍の時をほぼ同じくするが、基本的な視点をまったく違えている。『大學』致知格物傳について、董槐や車若水の改正案を紹介し、王柏が改正案を聞いて「千古の錯簡を洞照した」と絶讃したことを伝える。また宋濂と方孝孺も、基本認識は董槐以下と変わらないという。都穆は董槐以下と同様に、朱子定説を金科玉條のごとく尊ばず、柔軟に對應し是々非々を貫いており、宋元以來の朱子學刷新の氣風を具えていたことは間違いあるまい。

第七の引用は、朝鮮の權近（1352-1409、號は陽村）の『入學圖說』大學指掌之圖からである。盧守愼は圖を引かず、ただ愚按の補説のみを引くが、權近の狙いは逆に、朱子大學の經 1 章傳 10 章のシステムを「外は規模の大を極め、内は節目の詳を盡くす」と顯彰し、その全體構造を明らかにするところにある。論理構成上「大學（指掌）之圖」（圖 8）が樞要な位置を占めていることは改めていうまでもない。

(22) おそらく董槐や王柏などの、聽訟節をもって格物致知の義を理解しようとする、知性以上に精神性を重んじる解釋に啓發をうけたということであろう。



圖8『入學圖說』大學指掌之圖

だ安からざる者あり」と切りだす。「有未安者」のは、董槐の改定が朱子の經傳のシステムを論理の前提にしながら、三綱領と八條目における功（機能）と效（効果、貢獻）の關係をよく考えていないからである。權近のみるところ、格物致知は『大學』最初の用力の地である（功に關連）。これに反して、0₂の知止は物格知至以後の效をのべるにすぎない。諸傳の誠意章以下はみな工夫をのべたものであり、用力の初めに效をのべるべきでない以上、董槐のように格物致知章を知止のことからはじめてはならない。知止節 0₂の能得は間違いなく、明明德新民の結果みな止まるところをえたこと（物格知至の效）であり、かつ知止節を致知の傳とすれば、聽訟章もまた著落するところなくなるであらう。

權近の第二則は逆に朱子經 1 章および格物致知補傳の妥當なことを

權近は問答二則を案出して、(1) 董槐の改正大學の「未安」を論證し、(2) 朱子章句の三綱領八條目のシステムの意味するところを究明した。盧守愼が引くのは、權近が自らの解釋をのべるこの愚按の部分である。權近は第一則を「愚かつてこれ（董槐説）を觀て、その用意の深くして所見の卓たるに服して、服膺して忘れざること、けだしました年あり。今をもつてこれを考うるに、いま

論證する。論理的根據は、論述にあたってはかならず先に功を論じ、後にその效におよばねばならないことである。權近によれば、經 1 章は功（工夫）と效（功效）を交互にのべる構造からなる。三綱領 0₁ は功をもっていい、知止節 0₂ は效をもっていい、物有本末節 0₃ は功と效を兼ねてこれを結ぶ。八條目の前節（「古之欲明明徳於天下者」から「致知在格物」）は功をもっていい、後節（「物格而後知至」から「國治而後天下平」）は效をもっている。自天子節（「自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本」）は功をもって結び、本亂節（「其本亂而未治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也」）は效をもってこれを結ぶ。總じてその功をいえば、先に本末を分かち、その體要（止至善）におよび、その效をいえば、もっぱら體要を提げ、兼ねてその本末を統べている。朱子の立言は、まさに法ありというべきであろう。逆に傳 5 の格物致知章のばあい、「此謂知之至也」に終わる。傳の結語が效をもっていることからすれば、その上の缺文⁽²³⁾ はかならず知至の效であり、また效に先だつてはその功を説かねばならない。朱子の補傳はその論理上の要求をみごとに満たしているが、董槐のごとく知止節 0₂ を傳とすれば、效を説く知止の上にはかならず功を説く一連の文章がなければならず、矛盾に陥る。朱子の分析が正しいゆえんである。

盧守愼の權近引用において注意すべきは、(1) 王守仁による徹底的な反朱子の分析につづいて權近の分析をおき、(2) 朱子定説の隠れた論理を明らかにし、朱子稱贊をもって『大學集錄』を結んでいることである。朱子非難と朱子稱贊を併存する『大學集錄』の構成は、その書としての性格を考える上で重要な意味をもっている。

最後の引用は、「晦齋先生大學章句補遺後跋」である。盧守愼が『大學集錄』の末尾に李彦迪『大學章句補遺』のために書いた自らの跋文

(23) 朱子は「此句之上、別有闕文」という。

を引いたことは、李彦迪を顕彰するための文章を『大學集録』の自跋としたことを意味している。『大學集録』執筆自體が李彦迪『大學章句補遺』の刺激によること（既述）からすれば、盧守愼にとって同じ内容をあつかう跋文の兼用は無理のない選擇であろうが、ただそれだけではあるまい。跋文の兼用の意味するところを解明するには、跋文の内容を細かく分析する必要があるであろう。

盧守愼は跋文の冒頭、「孔子の遺書は、『大學』以上に詳細なるはなく、また『大學』以上に錯行するはない（孔氏遺書、莫詳大學、亦莫錯大學）」という。盧守愼の論述はわずか數語をもって『大學章句』と改正諸案の分析が重要であり、その分析が必要不可欠なことを明らかにしており、優れた書き出しといってよい。盧守愼は以下、程朱による釐正をのべ、董槐・王柏・黃震・宋濂・方孝孺・蔡清の改正を説き、最後に李彦迪の更定におよぶ。李彦迪による格物致知傳の更定については、聽訟第 4 節の有無をのぞいて、蔡清と符節を合するごとく暗合することを指摘し、朱子補傳にいわゆる「衆物の表裏精粗」をもって第 0₃ 節「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣」を解釋し、また同じ「吾心の全體大用」をもって第 0₂ 節「知止而後有定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮而後能得」を解釋しているという。また李彦迪による經 1 章の更定については、經文が第 0₁、0₄、4 節からなるとき、子曰の「必也使無訟乎」の「無訟」と「此謂知本」の「本」はみごとに呼應（「相合」）することを指摘し、『大學章句』がなぜその「本」を八條目の「修身」のこととせず、「本末」の解釋としたのかわからず、董槐・蔡清がなぜ聽訟節 4 を 0₃、0₂ の左に連ねたのかわからないという。盧守愼は朱子定説に異を唱えた李彦迪の解釋について、有餘を截り不足を補い、經傳本義を全うするのみならず、前賢のいまだ發せざるところを發すと稱贊を惜しまないのである。

盧守愼は「晦齋先生大學章句補遺後跋」を書いて、朱子定説を修正する諸々の朱子學者に言及し李彦迪の改正案を高く評價したわけであ

るが、上文につづく一文は盧守愼がそうせざるをえなかった理由をよく説明している。すなわち、「一家の解釋（朱子定説）のみが經文の意味を正しく解明しているわけではない。正統の解釋との少しの違いを大目にみても、道を損なうことなどあるはずもない。だが衆信は（朱子學に）歸一してすでに久しく、一得の功を妄とし、ひたすら除かんとする。これでは公論に値しない（發明經籍、非一家事。遷就少差、何損於道。顧衆信既久、指一得爲妄、亦只是辟、豈公論哉）」と考えるからである。この一文は盧守愼の道問學の精神をみごとにままでによく表わしている。學問は本質的に「一家の事（獨占物）」ではない。學者はそれゆえ、聖人を目標として問學に務めるからには、正統の域を越えて廣く學ばねばならず、たとえ正統ならざる見解であっても、寛容に耳を傾け眞摯に對處しなければならないのである。

盧守愼の視座は普遍性をもち、李彥迪『大學章句補遺』の分析に限定されない。むしろ廣範な分析にこそ必要な視座であり、朱子定説を強く肯定する權近にくわえて朱子定説を正面から否定する王守仁をあつかう網羅的な『大學集錄』にいつそうふさわしい。盧守愼が「晦齋先生大學章句補遺後跋」を『大學集錄』の後跋としたゆえんは、テーマや分析對象を共通にするためばかりではない。普遍を志向するゆえ「これを奉ずること神明のごとし」と自ら述懐する朱子定説も相對化せざるをえない、盧守愼自身の柔軟かつ非正統的な思考にその原因があるというべきであろう⁽²⁴⁾。すなわち、(1) 盧守愼は程朱の論理追求

(24) 최재목 「朝鮮에서 朱子『大學章句』에 대한 한 挑戰 -盧守愼의 『大學集錄』을 中心으로-」に教えられたところが多い。ただ崔在穆先生は『大學集錄』をもって脱朱子學、陽明學的な觀點から書かれた挑戰的な編纂物と結論されるが、非正統的とは思うものの脱朱子學、陽明學と斷じられることには同意することができない。

の精神のもと、「晦齋先生大學章句補遺後跋」を書きあげることによって、『改正大學』を『大學集錄』に擴張する普遍的な原理を自分のものにし、あわせて正統の域を越えて廣範に學習研究することにたいする、正確な自覺と強い自信を獲得する。(2) 普遍的な原理から来る、王守仁の古文大學も權近の改正批判もとりあげねばならないという要請のもと、朱子學者の改正大學諸案のみを收録する微温的な『改正大學』を果敢に改編して、あらゆる改正大學諸案を網羅する『大學集錄』を完成させた、云々ということが出来るにちがいない。

小結

盧守愼は明宗宣祖期の李滉と並ぶ有名な朱子學者である。その學術は精博をきわめ、儒林の聲望は李滉に先んじた(『朝鮮王朝實錄』卒記)。盧守愼の代表的な學術成果を時代順にあげれば、『夙興夜寐箴解』(1551)と「人心道心辨」(1559)と『大學集錄』(1584)ということができるであろう。『夙興夜寐箴解』は李滉が敬の哲學を樹立して『聖學十圖』に「夙興夜寐箴圖」を収めるのに、大きな示唆をあたえた。また「人心道心辨」は朝鮮朱子學者の人心道心論争の先鞭をつけた、一つの重要な思想座標であり⁽²⁵⁾、『大學集錄』は『大學章句』にたいするテキストクリティークの實例を集めた、朱子學體系の根幹を揺さぶる挑戦的な資料集ということができる⁽²⁶⁾。既述したごとく、いずれの著作も朝鮮朱子學史上の價値は計りしれない。

盧守愼の學術成就には、議論をとおして切磋琢磨した師友の存在も

(25) 林月恵「十六世紀朝鮮儒學家的「人心道心」論争」、前言を参照。

(26) 최재목 「朝鮮에서 朱子『大學章句』에 대한 한 挑戰 -盧守愼의『大學集錄』을 中心으로-」、걸어を参照。

大きい。李滉・金麟厚・李恆・李彦迪などである⁽²⁷⁾。各人の主張や立ち位置は異なるが、當時を代表する朱子學者であり、盧守愼との論争の學術レベルは、後の四端七情論争や湖洛論争に勝るとも劣らないかもしれない。筆者が退溪學成立前夜の學術を豊穡な知の世界と總じるゆえんは、盧守愼をめぐる知的巨人たちの學術活動が驚くほどに獨創的かつ多様であるからであり、個人的には知的な眞摯さと鋭敏な論理に感動を覺えたところにある。讀書をとおして過去の眞剣な思考から知的刺激と研究のエネルギーをもらったといえ、いささかオーバーであろうか。實り豊かなテーマに出會い、思想史研究者としてこれ以上の幸せはない。

本稿の思想分析によれば、當然、盧守愼をもって創造性に富む非正統的な朱子學者と規定しなければならないが、盧守愼は歴史的にはかえって、陸王學者と非難されることのほうが多い。本稿を終えるにあたって、その朝鮮朝の一連の評価について考えてみたい。陸王學者という盧守愼の評価が安定するのは、本人が亡くなった 1590 年の少し前あたりからである。當時、オピニオンリーダー⁽²⁸⁾の李滉(1570 没)は「寡悔の誤處は、禪學中より路頭を錯入して來たところ(若寡悔誤處、似是從禪學中錯入路頭來)」(『退溪集』卷 17・重答奇明彦)、あるいは「盧穌齋は象山の見を守る」(李德弘『溪山記善錄』記先生論人物之品)などといい、盧守愼を批判した。『朝鮮王朝實錄』卒記は李滉をうけて、盧守愼が羅欽順を推尊して、朱子の人心道心傳に異を立てたとし、「獨り

(27) 論弁の質に即していえば、『朱子大全』『朱子語類』を精讀した李滉・金麟厚・盧守愼と精讀の経験のない李彦迪・李恆の違いは大きい。前者は論理に優れ、後者は直感に優れるとのべてよいであろう。

(28) 『朝鮮王朝實錄』盧守愼卒記に「我國道學、至李滉出而大明」とある。

陸學宗旨を參用した」と譏る。象山の見ないし陸學とは陸九淵(1139-1192. 號は象山)の學術の謂いであり、結局のところ陽明學を意味している。やや下って、李植(1584-1647. 號は澤堂)は盧守愼が朱子の「人心道心傳注」を改作し、『大學章句』を改定したといい、「その言みな陸王の意なり」「陸王を尊びて自ら孟子の論に異ならんと欲す」と斷ずる(『澤堂集』別15・雜著・追錄)。果ては河謙鎮(1870-1946. 號は晦峯)『東儒學案』(1943)も朝鮮朱子學の傳統にのっとりて盧守愼を自著に收録しようとしな。學統上、朱子學者と認めることができないからである。

朝鮮朝の朱子學者たちは代々、盧守愼を陽明學者と考えてきたわけであるが、現在からみれば、過ぎて政治的な評價といわざるをえない。確かに盧守愼が朱子定説に異を唱え、非正統的であったことは事實であるけれども、羅欽順を尊重しその學的影響をうけたことを根據として、盧守愼を陽明學者と斷じることは明白な論理矛盾を犯している。羅欽順は朱子學者であり、間違いなく程朱を擁護し陸王に反對したからである。また盧守愼は禪學の影響が深いからといって陽明學と譏るのも、論理上正しくない。禪學の存在がなければ陽明學同様、朱子學も成立しないからである。驚くことには盧守愼『大學集錄』の研究姿勢は李彦迪『大學章句補遺』と大差ないにもかかわらず、歴代の朱子學者たちは李彦迪を朝鮮朝四賢の一人として尊重するが、盧守愼の評價はそれとまったく相反する。歴史的な評價は當時の政治動向によって大きく左右されるやすい。過度に歴史的評價を重んじる必要はないであろう。

東アジアに視野を広げれば、盧守愼のような朱子定説刷新の學風は當時のごく一般的な傾向であり、朱子のドグマを金科玉條のように尊ばない、非正統的な朱子學が元明や江戸の思想の大きな流れを形成したことは間違いないところであろう。『朱子大全』『朱子語類』には朱子定説への疑問や批判が溢れており、定説の逐一を細かく問題にすることは朱子生存時以來の朱子スクール内の一般的な傾向であったから

である⁽²⁹⁾。非正統的な朱子學者を斯文亂賊と排斥し思想研究の枠外におけば、朝鮮朝をのぞいては東アジアの朱子學史は成立しないのである。朝鮮思想史研究においても、歴史的に異端とされた思想を正當に評價しその名譽回復を果たすことによって、刷りこまれた非寛容な朱子學の内包を定義しなおし朱子學の外延をひろげ、朱子學史の内容を豊かにしなければならないと考えるのは、おそらくわたしのみではあるまい。

(29) 朱子正統を任じる宋時烈の代表作の一つが『朱子言論同異考』であることからすれば、朱子定説の批判のないところに朱子學の發展はないといっても過言ではないであろう。